

## 【レポートの続き】: 欧米言語の特徴を知ることによって彼らの考えが分かる

文化や階級を異にする構成員が含まれている集団を「経営」する、あるいは「コントロール」するためには、「論理的」な説明が必要となる。

問題がここにあり、それを解決するためには、このようにしなければならない、そのためにはこのような努力が必要である、などなどを説得し理解を求めするためには、論理的に筋道を立てなければならない。多分、これが、異種混合の集団を経営するうえでの唯一の方法であろう。

その論理的説明には「言語」という道具が必要となる。西洋世界が長きに渡って世界をコントロールできた要因の一つに、この言語、欧州言語の存在を挙げることができる。この論理的な、構造的な言語を持っている強さでもって、西洋世界は、自国内の経営だけでなく、植民地を経営する場合も、うまく収めてくることができた。植民地から独立した諸国が、今でも元の宗主国の言語を公用語としていることから、その言語による浸透力が高かったことが分かる。

これらの欧州言語の中でも、英語が抜きん出て、世界共通語の地位を占めるようになった。すなわち世界の経営に関わる国連でも、国と国の間の外交でも、そしてグローバル企業の経営においても、全ては英語をベースにして運営されている。

中でも英語が「ナンバーワン言語」の位置を占めることができたのは、言語そのものが他の欧州言語と比べて構造や時制や人称が「単純」であるということが大いにその力となった、と考えられる。

ともあれ、自分たちの文化とは大きく異なる文化の下で生きてきた世界の人々へ、こちらの考えを述べ何とか合意を得ようとするならば、論理的に筋道立てて、明快に表現するしかないことは明らかである。欧米人の思考(ものの考え方、見方)が言語を生み文化を作り出す。言語が先か、文化が先かは、定かではないが思考と言語は一致している。そのことが米国の知財戦略にも現れている。

### まとめ、なぜ英語が今の位置を享受できるようになったのだろうか

- (1) 英語は、物事や考えを論理的に表現するのに適した言語である、
- (2) 英語は、論理的記述に適している言語である

- (3) 英語は、構造的にしっかりした言語である
- (4) 構造的であることは、表現の形式において自由度が少ないことである
- (5) これは、外国語として学習しやすい言語、つまり、習う人の民族文化に影響されずに、頭でその法則を理解すれば学習の基本が得られるということになる
- (6) 元来の英語には欠けていた人間の思索、技術、社会体制等を表現するための高度な単語をラテン語から借用してきて整えたので、完成度と普遍性をもっている言語である
- (7) 19世紀に始まった科学技術、工業化、システム化文明の時代は、論理的記述を必要とし、そのニーズに適した言語であった
- (8) 同時にこの二十世紀は、英語を母語とする英国と米国が、圧倒的な政治、経済、軍事力の優越を維持し続けた世紀であった
- (9) ソ連邦の崩壊、ドイツの統一、中国の共産資本主義によって、特に経済面で米国式の優越を多くの人々が信じたこと、この結果、米国式のグローバル化が急速に進展した
- (10) グローバルなシステムを経営・運営するためには、そこで使われる言葉をできるだけ一本化することが効率上必要であった、それが英語である。

結果として、唯一の国際共通語としての英語の位置はますます強固になるばかりである。英語習得において、日本人は世界の中でもっとも不利な条件下にある。我々がどれほど不利な戦いを強いられているかは、考えるだけでも憂鬱になるほどであるが、まさか今更、鎖国をするわけにもいかず、逃げるわけにはいかない。これは戦いだから、この武器の扱いができるだけうまくなるように修得するしかない。

(篠原レポート 2009/10/10)